（若狭鯖街道熊川宿資料館（宿場館）　展示説明：若狭街道）

若狭街道という道

若狭海道は古代から、港町である小浜から昔の首都である奈良や京都へ、海産物やその他の物を運ぶために利用されていました。江戸時代（1603 年～1867 年）には、鯖街道（「鯖の道」）のネットワークを構成する多数の交易路の中で、最もよく行き来された道でした。若狭街道は、小浜から熊川宿という宿場町へと延び、山あいにある保坂峠を越えて、南は朽木村に、さらに南へ行くと大原と八瀬を通り、京都北部の出町柳で終わりました。

若狭街道の役割に関する史料

小浜市場仲買文書（小浜の市場の仲買の記録）など、江戸時代に若狭街道で行われた輸送や商取引の記録から、当時に行われた旅行の規模を推定することができます。18 世紀半ばに出版された他の本には、小浜と熊川宿の間で川船による輸送を可能にすることを目的とした建設プロジェクトの説明と、ある特定の年に何百頭もの馬が宿場町を通過したというデータが記載されています。

巡礼路の一部

若狭街道は、重要な交易路であっただけでなく、宗教的生活においても重要な役割を果たしました。若狭街道のある箇所は、慈悲の菩薩である観音を祀る 33 の寺院を含む、西日本にある西国観音巡礼路上の二つの立ち寄り先である松尾寺と宝厳寺を結ぶのに役立ちました。熊川宿の 18 世紀初頭の業務記録によれば、時には何百人もの巡礼者が、若狭街道を旅する途中で熊川宿に泊まったとあります。